

スクーバダイビング指導者の現状とマーケット研究 (Ⅱ)

—ダイビングへのライフスタイルについて—

川西 正志*, 小山 公彦**, 柳 敏晴*, 谷 健二*

A Sociological Study on the Present Situation and Market of Scuba Diving Instructors (Ⅱ)

—With Special Reference to the Diving Lifestyle—

Masashi KAWANISHI*, Kimihiko OYAMA**,
Toshiharu YANAGI*, and Kenji TANI*

Abstract

The purpose of this study is to empirically assess, and do a factor analysis of the lifestyle of the scuba diving instructors. The AIO (Activities, Interests, and Opinions) approach is used to analyze the lifestyle. A battery of 27 AIO statements, partly based upon the past literature, was specifically developed for this study. The data for the study were collected from a total of 227 certificated scuba diving instructors who registered with Japan Association of Underwater Exploration and Shakai Sports Center, in November, 1991. In this study, a factor analysis was performed to identify the factor structure underlying the lifestyle of 227 subjects. The case classification analyses based upon lifestyle factors were done by quick cluster analysis.

The main results are as follows :

1. Eight lifestyle factors were identified and named : (1) healthy lifestyle effects, (2) sports models and sports fashions, (3) promotion, (4) improvement of leisure activities, (5) environmental condition, (6) participation barrier, (7) consumption patterns, and (8) challenge spirits.
2. The lifestyle factors were much considerably affected by professional job status.
3. The eight factors were grouped in four major clusters : (1) challenge diving oriented cluster, (2) healthy diving oriented cluster, (3) leisure diving oriented cluster, and (4) negative diving oriented cluster.

KEY WORDS : *Scuba Diving, Instructor, Lifestyle, Factor Structure*

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima 891-23 Japan.

** (社団法人) 海中開発技術協会 Japan Association of Underwater Exploration, Nagata, Chiyoda-ku, Tokyo 100 Japan

緒 言

国民各層の余暇・レジャー重視が高まる中、海洋性レジャースポーツの需要も増加の傾向にある。海洋レジャースポーツの内容としては、ヨット、モーターボート、ボードセイリング、ジェットスキー、スクーバダイビング、スポーツ・フィッシングなど様々な活動が考えられる。

滞在型海洋リゾート地などでのプログラムとしてスクーバダイビングは人気が高い。レジャー白書'92³⁰⁾によれば余暇活動の潜在需要においても上位から8位に位置し、特に男性においては、6位に位置づけられている。

スクーバダイビングは、安全性確保の面からも各種潜水団体主催の短期講習会への参加で比較的容易に取得できるスクーバダイバーとしての資格認定としてのCカードの発行を行っている。このCカードを取得することで各地のダイビングスポットで潜水機器の借用やエアーの補給が可能となる。Cカード発行数は、レジャーダイビング年報²⁷⁾によれば今年度で50万人を越える勢いである。

当然のことであるが、Cカード取得者が増加する一方で、それらを認定する立場のCカード発行者である指導員の数も1988年ごろから急激な伸びを示している。こうしたスクーバダイビングの人気の高まりとともに、事故の問題や数多くあるCカード発行団体の認定基準と社会的役割・効果の明確化など様々な問題を抱えている。

とりわけ、指導者の資質の向上と標準化は適切なCカード発行の意味からも重要な課題である。この点については、文部省もいち早く社会体育指導者認定事業の一つにスクーバダイビング指導者の認定事業を(財団法人)社会スポーツセンターを中心に実施している。しかしながら、従来からあるCカード発行団体との連携が難しく、また、民間スポーツクラブなどで独自に新しいCカード発行団体を設立する動きが活発化するなど、国内的なレベルでの指導者の資格の標準化には、まだまだ多くの問題を抱えているのが現状である。

これまで、社会学的研究において社会体育指導者に関する研究では¹⁵⁾、主に、ボランティア指導

者の指導実態や指導行動^{11) 28)}の要因の解明に主眼が置かれていた。最近、商業スポーツクラブの資質や専門的知識・技術^{16) 22) 31)}、さらには、職場満足²⁹⁾や転職志向¹⁷⁾などの諸現象を明らかにした研究が出始めている。また、スクーバダイバーに関する研究では、ダイバーのパフォーマンスと不安要因やパーソナリティなどの関係についての社会心理学的な研究がBaddeley¹⁾、Buchanan²⁾、Griffiths^{4) 5) 6) 7)}、Heyman¹⁰⁾、Martin²⁴⁾等によってなされている程度である。特に、ダイビング指導者の資質や指導行動についての研究は皆無である。

指導者の指導行動において、その対象人数や日数など量的側面についてはよく研究されるが、指導に関する価値観や態度などの質的側面についての検討はあまりなされていない。この点については、マーケティング研究^{3) 23) 25) 26) 8) 9) 18)}や筆者らの一連の研究^{12) 13) 14) 19) 20) 21)}でその有効性が実証されているライフスタイルによる研究手法がより適切な指導の質的側面を記述できる可能性をもっている。

目 的

本研究の目的は、スクーバダイビング指導者の指導行動に関するライフスタイルの因子構造と、それによる指導者の分類を明らかにすることである。

方 法

1. 調査対象

本調査の対象者は、全日本潜水連盟(JUDF)、ナウイ・エンタープライズ(NAUI)、パディ・ジャパン(PADI)、(財団法人)社会スポーツセンターの協力を得てスクーバダイビング指導者500名(Cカード発行者)の男女の指導者である。

2. 調査方法

本調査は、所定の調査用紙を用い、郵送法により、調査依頼状及び調査票、返信用封筒を同封し、1991年11月7日から15日の間に、スクーバダイビング指導者500名を対象に郵送した。同年12月2日を最終締切として、約20日間の調査期間を設けた。有効回収回答数は227、有効回答率は45.4%であった(表1)。

表1 サンプルの回収率

配布数	有効回答数	回収率
500	227	45.4%

3. 調査内容

本研究で調査項目は、表2に示すように(1)属性、(2)休暇・余暇、(3)指導行動、(4)指導者資格、(5)ライフスタイルなどに関連した要因群ごとに設定された、計51項目についてである。ライフスタイル項目は、過去の筆者らの一連の研究によって開発されたマーケティングの分野で用いられるAIO(Activity: 日々のダイビング活動内容, Interests: ダイビング活動周辺の事物への興味・関心, Opinion: スポーツ活動に対する社会的・個人的諸問題についての意見)アプローチ³⁰⁾によって操作設定した社会心理学的な態度尺度である。

4. 分析方法

本研究で用いる分析対象標本は、各項目ごとの回答で欠損値のあるものは除いてある。分析対象内容は、属性、指導職業形態、ライフスタイル項目(27項目)についてである。

分析の手順は、まず全体的特性について、全調査項目の単純集計を実施した。次に指導者のダイビングに関するライフスタイル測定は、「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階測定順に5から1までの得点を与えたリッカートタイプの間隔尺度として数量化された。

本研究では、ライフスタイル構造を明らかにするため、測定されたライフスタイル項目を主因子

法と因子軸の回転にはバリマックス直交回転を用いた因子分析により因子の抽出と命名を行った。

そして、抽出された因子によって、クイッククラスター分析によりライフスタイル情報の圧縮とケース分類を実施した。

各ライフスタイル因子の平均因子得点の年齢別、専門職種別の平均値及びグループ別比率の差の検定には分散分析及び χ^2 検定によって比較を行った。

本研究のデータ分析は、鹿屋体育大学計算機FACOM M760/04を利用し、統計プログラムは、SPSS/Xを用いた。

結果及び考察

1. スクーバダイビング指導者のサンプル属性

サンプルの属性について、表3にその結果をまとめた。所属団体については、ナウイ、パディ、ジュディフに16~18%の割合で、社会スポーツセンターに約半数近くが所属している。社会スポーツセンターには、各種Cカード発行団体に所属した指導者で構成され、実際には、それへの所属が優先されると思われる。性別については、「男性」が9割以上を占めた。年齢については、30歳代が約4割で最も多く、ついで40歳代の26.0%、20歳代の22.5%、50歳代以上の12.3%の順であった。これらのうち、既婚者が65.2%を占めた。職業では、専門的・技術職の35%と、自営業の32%が多い他ばらつきがみられた。

インストラクター経験数については、「1年~5年」が40.5%で最も多く、次いで「6年~10年」

表2 調査内容

要因群	質問項目
1. 属性	1. 所属団体 2. 性別 3. 年齢 4. 婚姻関係 5. 職業 6. インストラクター継続年数 7. 最終学歴 8. 住まい 9. 暮らし向き
2. 余暇	1. 休暇制度 2. 活動種目 3. 過ごす相手 4. 充実度 5. 余暇に対する考え方
3. 指導行動	1. 充実度 2. 指導活動状況(回数, 時間, 人数, 場所)
4. 指導者資格	1. 取得目的 2. 職業形態 3. 今後の継続年数 4. 重要度 5. 取得したことによるメリット(16項目)
5. 指導ライフスタイル	1. AIO27項目

表3 サンプルの属性 (N=227)

属 性	N (%)	属 性	N (%)
所属団体		インストラクター継続年数	
ナウイ (NAUI)	42 (18.5)	1~5年	92 (40.5)
パディ (PADI)	36 (15.9)	6~10年	63 (27.7)
ジュディフ (JUDF)	40 (17.6)	11~15年	27 (11.9)
社スポ	109 (48.0)	16~20年	20 (8.8)
		21年以上	8 (3.5)
性 別		N.A.	17 (7.5)
男性	213 (93.8)		[M=8.2年]
女性	14 (6.2)		
		最終学歴	
年 齢		中学校卒	5 (2.2)
20歳代	51 (22.5)	高等学校卒	77 (33.9)
30歳代	89 (39.2)	専門学校卒	23 (10.1)
40歳代	59 (26.0)	短大・高専卒	13 (5.7)
50歳代以上	28 (12.3)	大学卒	102 (44.9)
		大学院卒	5 (2.2)
婚姻関係		その他	2 (0.9)
独身	78 (34.4)	住 ま い	
既婚	148 (65.2)	持ち家	115 (50.7)
その他	1 (0.4)	借家	36 (5.9)
職 業		公営住宅	14 (6.2)
事務職	19 (8.4)	アパート	47 (20.7)
自営業	72 (31.7)	社宅・寮	10 (4.4)
自由業	19 (8.4)	下宿	2 (0.9)
セールス・営業マン	11 (4.8)	その他	3 (1.3)
専門・技術職	80 (35.2)	暮らし向き	
労務職	3 (1.3)	上	6 (2.6)
店員	8 (3.5)	中の上	33 (14.5)
公務員	12 (5.3)	中	106 (46.7)
その他	3 (1.3)	中の下	49 (21.6)
		下の上	26 (11.5)
		下の下	7 (3.1)

の30.6%、「11年~15年」の12.6%、「16年~20年」の11.7%、「21年以上」の4.7%の順であった。平均年数は8.2年であった。

最終学歴は、「大学卒」の者が最も多く44.9%、次いで「高等学校卒」33.9%、「専門学校卒」10.1%、以下「短大・高専卒」、「中学校卒」、「大学院卒」の順であった。居住形態は、50.7%の者が「持ち家」で、「マンション・アパート」20.7%、「借家」15.9%、以下「社宅」、「公営住宅」の順

であった。現在の暮らし向きについては、「中程度」と答えたものが46.7%を占めた。

このように、サンプル全体の5割が30歳代から40歳代の働き盛りの中年層となっており、インストラクター経験年数については、熟年者が少ない。また、学歴については、高学歴の占める割合が多く、職種は自由な時間が取れる自営業や自由業の占める割合が高い。暮らし向きについては、全体の約5割が中程度となっており、中流意識が強い傾向がある。

2. スクーバダイビング指導者のライフスタイル
因子構造

用意されたライフスタイル (以下LSと略す)
項目27を因子分析した結果, 表4に示すように固

有値1.0以上の8因子を抽出した。これら8因子
による全体の累積寄与率は, 47.3であった。

これら各々の因子は, 因子負荷量の大きさによっ
て解釈し, 次のように命名された。

表4 LS項目の因子分析結果

ライフスタイル項目	寄与率 (累積寄与率)	バリマックス回転後の因子負荷量								Cronbach's α値
		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	
【ウェルネス習慣・効果】	19.9 (19.9)									0.81
ダイビングによる体力づくりにこころがけている		.78	.11	.19	.05	.07	.03	.05	-.08	
ダイビングによって規則正しい生活をしていると思っている		.71	.18	.16	-.02	.20	.00	.02	-.04	
ダイビングによって健康の保持・増進に心がけている		.69	.07	.26	.16	.03	-.09	-.08	-.01	
ダイビングは身体の向上に役立つと思う		.60	.04	-.14	.19	.03	-.13	.01	.19	
ダイビングは精神面の向上に役立つと思っている		.48	.13	.39	.14	-.02	-.05	-.25	.11	
【流行・オピニオンリーダー】	5.7 (25.6)									0.81
ダイビングに関する情報や資料を収集している		.10	.77	.07	.04	.25	-.06	.10	.08	
ダイビングに関する情報に興味, 関心を持っている		.11	.71	.27	.14	.20	-.22	.06	-.00	
新しい知識, 技術を取り入れたダイビング活動に興味がある		.15	.64	.21	.07	.03	.01	-.10	-.01	
ダイビングは自分の日常生活の中で重要なことだと考えている		.19	.53	.28	.36	-.07	-.03	-.23	.09	
【普及・振興】	5.1 (30.7)									0.72
仲間づくりに役立つダイビングに興味がある		.14	.08	.59	.03	.19	-.19	.14	.15	
ダイビングによって自分の行動範囲を広げたいと思っている		.09	.34	.51	.12	.30	-.03	.07	.11	
社会や人のためになるダイビングに興味がある		.22	.24	.50	.22	.01	-.09	-.08	-.05	
楽しみを目的としたダイビングに興味がある		.09	.19	.43	.05	.14	-.19	.05	-.15	
【余暇充実】	4.4 (35.1)									0.61
ダイビング活動によって日常生活に変化を与えたいと思っている		.19	.19	-.08	.69	.24	-.13	.10	-.01	
自由な時間が増えたらもっとダイビングを行いたいと考えている		.12	.06	.16	.60	.13	-.11	.01	-.05	
ダイビングを日常生活の中により多く取り入れたいと思っている		.10	.16	.45	.45	.13	.00	-.06	.13	
【環境・条件】	3.9 (39.0)									0.66
人から詳しいダイビングスポットの情報を知るとどこでも行く		.13	.16	.13	.10	.58	.09	-.21	.19	
ダイビングの助言を受けるよい指導者が身近にいる		.08	-.01	.19	.15	.57	-.03	.14	.03	
ダイビングの手助けとなるよいプログラムが身近にある		.05	.02	.05	.10	.49	-.01	-.11	.07	
【参加抑制】	3.4 (42.4)									0.60
病気や障害を持っているので自分にダイビングは適さない		-.10	.07	-.16	-.04	-.06	.69	.16	.12	
ダイビングのための時間はムダだと思っている		-.01	-.17	.00	-.02	.02	.55	.05	.06	
ダイビングを行うことは自分の年齢, 体力に適していない		-.03	-.04	-.19	-.15	.05	.44	.04	-.08	
【経済性】	2.6 (45.0)									0.53
ダイビングのために利用する施設・設備の使用料は高いと思っている		.03	-.09	.04	.16	.05	.17	.57	.05	
ダイビング用品は高いと思っている		-.05	-.01	.18	-.13	-.17	.18	.51	-.02	
ダイビングにかかるお金はあまり気にならない		.02	-.05	.08	-.00	.02	.03	-.50	.08	
【チャレンジ】	2.3 (47.3)									0.57
少々の危険があるダイビングにもチャレンジする		.02	.03	-.03	-.07	.03	.04	.03	.64	
冒険的なダイビングに興味がある		.02	.04	.10	.07	.17	.04	-.11	.62	

まず、第1因子では、ダイビングによって「体力づくりに心がけている」「規則正しい生活をしている」「健康の保持・増進に心がけている」など、ダイビング活動を通して健康的な生活習慣や効果を目的としていることから、ウェルネス習慣・効果因子と命名した。

第2因子は、ダイビングに関する「情報や資料を収集したり興味がある」や「新しい知識や技術を取り入れたダイビングに興味がある」など、ダイビングに対して積極的なリーダーシップや流行を重視する、いわゆる流行・オピニオンリーダー因子としての特性をもっている。第3因子は、「仲間づくりに役立つダイビングに興味がある」「ダイビングによって自分の行動範囲を広げたい」「社会や人のためになるダイビングに興味がある」など、社会的なメリットを求めたダイビングの普及・振興に対しての積極的な取り組みがみられる。この因子は普及・振興と命名された。

第4因子は、「ダイビング活動によって日常生活に変化を与えたい」「自由な時間が増えたらもっとダイビングを行いたいと考えている」など、余暇時間の充実のためによりダイビングに従事する時間をつくりたいとするなど、余暇充実の因子としての特性をもっている。

第5因子は、「人から詳しいダイビングスポットの情報を聞くとどこへでも行く」や「ダイビングの助言を受ける良い指導者が身近にいる」「プログラムがある」など、ダイビングに対する情報、指導者、プログラムに関する環境条件因子とみることができる。

第6因子は、「病気や障害をもっているので自分にダイビングは適さない」「ダイビングのための時間は無駄だと思っている」など自分の身体的条件や価値観などから、ダイビング活動への参加に抑制的な考えを持っている参加抑制因子とした。

第7因子は「ダイビングのために利用する施設・設備の使用料は高いと思っている」「ダイビング用品は高いと思っている」「ダイビングにかかるお金はあまり気にならない」（負の相関）などダイビングの経済性因子と命名した。

最後の第8因子は、「少々危険があるダイビン

グにもチャレンジする」や「冒険的なダイビングに興味ある」などダイビングに対してチャレンジ精神をもった因子といえよう。

以上、ダイビング活動に特定されたライフスタイル因子は、1. ウェルネス習慣・効果因子、2. 流行・オピニオンリーダー因子、3. 普及・振興因子、4. 余暇充実因子、5. 環境条件因子、6. 参加抑制因子、7. 経済性因子、8. チャレンジ因子の8因子が抽出された。これらの因子は、これまでの研究におけるレジャーやバケーション、日常的なライフスタイル因子^{13) 14) 21)}と多くの点で共通しているものの、チャレンジ因子においては、ダイビング特有の未知の世界の探索や限界への挑戦などの活動特性と深いかわりをもっていると思われる。これら各因子ごとのライフスタイル項目の合計得点の信頼性 (reliability of measurement) については、表4中のクロンバックの α 係数をみても、どの因子においても比較的高い値を示している。

次に、これら8因子を年齢別、職業別の平均因子得点をみたのが、表5. 6である。分散分析及びt検定で有意差がみられた因子を見てみると次のようである。まず、年齢別では、ウェルネス習慣・効果因子と普及・振興因子にそれぞれ5%水準で有意差がみられた。これは、ダイビングを通じてのウェルネス習慣は、50歳代以上が最も高く、年代の増加とともに高くなる。また、ダイビングの普及・振興因子は、20歳代が最も高く、年代が若くなるほど普及活動への意欲が高い事を示している。

職業形態では、専門職と非専門職の間で、流行・オピニオンリーダー因子が0.5%水準で、余暇充実因子が1%水準で、参加抑制、経済性、チャレンジ因子が5%水準で有意差がみられた。これらは、プロとして従事している専門職では、ダイビングに対する流行やリーダーシップ機能が高い反面、参加抑制やチャレンジ因子も高くなる傾向である。それに比べ、余暇充実や経済性因子が非専門職で高いなど、専門職の職業的な身体面へのデメリットやレジャー活動と指導業務の狭間にある非専門職の差が出てきている。

表5 L S因子と年齢

ライフスタイル因子	因子得点平均値 年 齢				F 値
	20代 (N=51)	30代 (N=89)	40代 (N=59)	50代以上 (N=28)	
F 1 ウェルネス習慣・効果	-.10	-.18	.22	.31	3.81*
F 2 流行・オピニオンリーダー	.02	.01	.07	-.22	.67
F 3 普及・振興	.11	.09	-.01	-.46	3.66*
F 4 余暇充実	.14	.04	-.12	-.13	1.16
F 5 環境・条件	.18	.00	-.10	-.12	1.34
F 6 参加抑制	.18	-.03	-.16	.11	1.80
F 7 経済性	.11	-.09	.08	-.10	1.02
F 8 チャレンジ	.21	-.08	.02	-.15	1.95

* p < .05

表6 職業形態L S因子得点

ライフスタイル因子	因子得点平均値 職 業 形 態		F 値
	専 門 職 (N=173)	非専門職 (N=54)	
F 1 ウェルネス習慣・効果	-.01	.04	1.07
F 2 流行・オピニオンリーダー	.12	-.38	2.27***
F 3 普及・振興	-.03	.08	1.04
F 4 余暇充実	-.07	.22	1.87**
F 5 環境・条件	.06	-.20	1.07
F 6 参加抑制	.01	-.04	1.69*
F 7 経済性	-.09	.27	1.69*
F 8 チャレンジ	.07	-.22	1.54*

* p < .05 ** p < .01 *** p < .005

これらの結果から、スクーバダイビングの指導者のライフスタイル因子は、ダイビングの健康的な効果や習慣を重視し、新しい情報収集に対する積極的なリーダーシップ、さらには、普及振興に対する意欲、余暇充実への願望などにおいておおよその説明がつく。しかしながら、ダイビング環境、身体的、経済的条件の整備状況にもかなり影響をうけたライフスタイル特性をもっている。そして、加齢とともに、健康的志向が高く、逆に、普及振興に対する意欲が減少している。さらに、専門職は、プロとしての意欲と裏腹に身体的なデメリットに特徴づけられ、非専門職は、限られた余暇時間での、ボランティア指導と自分自身の余

暇や健康志向に特徴づけられる。

3. ライフスタイル因子によるケース分類

抽出された8因子をもとに、クイッククラスター分析を使ってケース分類を行った。その結果が、表7である。グループは、4クラスターグループに分類され、各々の平均因子得点は、分散分析の結果チャレンジ因子以外の7因子において有意な差がみられた。第1グループには、20人(8.8%)が分類された。チャレンジ精神が最も高く、ウェルネス習慣への志向とともに、参加抑制が最も強いグループである。第2グループは、57名(25.1%)で、ウェルネス習慣、流行・オピニオンリー

表7 クラスタグループとLS因子得点

ライフスタイル因子	クラスタグループ				F値
	Group 1 (N=20)	Group 2 (N=57)	Group 3 (N=140)	Group 4 (N=10)	
F 1 ウェルネス習慣・効果	.35	.53	-.22	-.59	13.65***
F 2 流行・オピニオンリーダー	.07	.29	.07	-2.78	62.84***
F 3 普及・振興	-.28	.32	-.08	-.11	4.28**
F 4 余暇充実	.15	-.63	.28	-.57	23.05***
F 5 環境・条件	.14	-.26	.14	-.71	6.66***
F 6 参加抑制	1.87	-.24	-.19	.23	82.36***
F 7 経済性	-.05	-.43	.20	-.18	9.49***
F 8 チャレンジ	.32	.08	-.08	-.00	1.79

p<.01 *p<.005

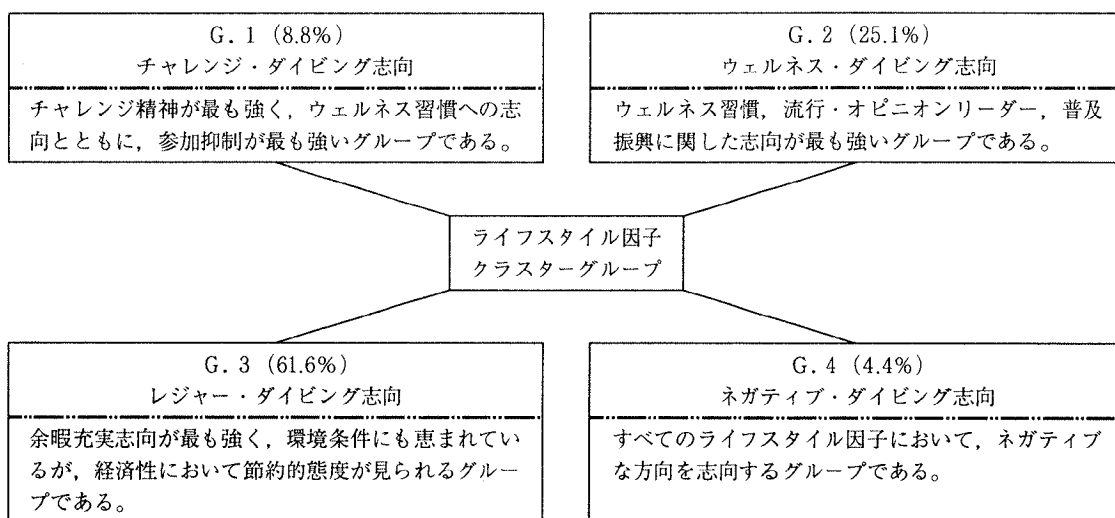


図1 クラスタ・グループの特徴

ダー、普及振興への意欲がみられる。第3グループは140人(61.6%)と全体の大半を占めるグループで、余暇充実志向が最も強く、環境条件にも恵まれているが、経済性において節約的態度がみられる。そして第4グループは、参加抑制因子が最も高く、他の因子においてもすべてネガティブな傾向を示している特性をもっている。

これらのグループをそれぞれ第1グループは、「チャレンジ・ダイビング志向」、第2グループを「ウェルネス・ダイビング志向」、第3グループを「レジャー・ダイビング志向」、第4グループを「ネガティブ・ダイビング志向」などの集団に分

類することができよう。

結 語

本研究では、スクーバダイビング指導者のライフスタイルの因子構造とケース分類を明らかにした。その結果、次のことが明らかになった。

- 1) ダイビング活動に特定されたライフスタイル因子は、1. ウェルネス習慣・効果因子、2. 流行・オピニオンリーダー因子、3. 普及振興因子、4. 余暇充実因子、5. 環境条件因子、6. 参加抑制因子、7. 経済性因子、8. チャレンジ因子の8因子が抽出された。

2) 年齢別では, ウェルネス習慣・効果因子と普及・振興因子にそれぞれ5%水準で有意差がみられた。職業形態では, 専門職と非専門職の間で, 流行・オピニオンリーダー因子が0.5%水準で, 余暇充実因子が1%水準で, 参加抑制, 経済性, チャレンジ因子が5%水準で有意差がみられた。

3) 8因子によってさらに「チャレンジ・ダイビング志向」, 「ウェルネス・ダイビング志向」, 「レジャー・ダイビング志向」, 「ネガティブ・ダイビング志向」の4集団に分類された。

このように, スクーバダイビング指導者のライフスタイルの構造や構成集団の主だった特性が明らかになった。それらは, 年齢などの人口統計学的要因の影響³⁾も従来の研究同様みられたが, 同じ指導者資格をもちながらもプロとボランティア指導者では, そのライフスタイルにかなりの差がみられた。この点については専門職と非専門職が混在する指導者資格において, その資格内容の検討とともに今後の重要な課題である。

謝 辞

本研究を実施するにあたり, 社団法人海中開発技術協会, 全日本潜水連盟(JUDF), (株)パティ・ジャパン, (株)ナウイ・エンタープライズ, (財)社会スポーツセンターの各機関の関係者の方々には大変お世話になった。特に, (社)海中開発技術協会専務理事 渡辺 信廣氏には多大なご協力を頂いた。また, 調査データの収集整理に際しては, 本学卒業生である亀井晶君に大変お世話になった。ここに, 皆様に心より感謝するとともに, 本研究に対してきたんないご批判を賜りたい。

引用文献

- 1) Baddeley, A. and Idzikowski, C., 1985, "Anxiety, Manual Dexterity and Diver Performance", *Ergonomics* 28 (10), 1475-1482.
- 2) Buchanan, T., Christensen, J. E. and Burdge, R. J., 1981, "Social Groups and the Meanings of Outdoor Recreation Activities", *Journal of Leisure Research* 13 (3), 245-266.
- 3) Feldman, S. D. and Thielbar, G. W. ed, 1975, *Lifestyles: Diversity in American Society*, 2nd Ed., Little Brown & Co., Boston, 1-4.
- 4) Griffiths, T. J., Steel, D. H., and Vaccaro, P., 1978, "Anxiety Levels of Beginning Scuba Students", *Perceptual and Motor Skills* 47, 312-314.
- 5) Griffiths, T. J., Steel, D. H. and Vaccaro, P., 1979, "Relationship Between Anxiety and performance in Scuba Diving", *Perceptual and Motor Skills* 48 (3), 1009-1010.
- 6) Griffiths, T. J., Steel, D. H. and Vaccaro, Paul., 1982, "Anxiety of Scuba Divers: A Multidimensional Approach", *Perceptual and Motor Skills* 55 (2), 611-614.
- 7) Griffiths, T. J., Steel, D. H., Vaccaro, P., Allen, R. B. and Karpman, M., 1985, "The Effects of Relaxation and Cognitive Rehearsal on the Anxiety Levels and Performance of Scuba Students", *International Journal of Sport Psychology* 16 (2), 113-119.
- 8) 原田宗彦, 世戸俊男, 1987, 「スポーツ消費者のライフスタイルに関する研究」レクリエーション研究, 18, 68-71.
- 9) 原田宗彦, 菊地秀夫, 1990, 「スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究」体育学研究, 35-3, 241-251.
- 10) Heyman, S. R. and Rose, K. G., 1981, "The Relationships of Personality and Behavioral Characteristics to the Scuba Performance of Novices", North American Society for the Psychology of Sport and Physical Activity. Annual Conference. Moterey, California.
- 11) 金崎良三, 1978, 「社会体育指導者の指導行動とその規定要因に関する社会学的研究」体育学研究, 5, 47-57.
- 12) 川西正志, 河野眞, 北村尚浩, 江橋慎四郎, 1990, 「成人男性のライフスタイル・ステージからみたレジャー・ライフスタイル」, レクリエーション研究23号, 46-47.
- 13) 川西正志, 菊地秀夫, 北村尚浩, 1991, 「成人男性の Aging とパケーション・ライフスタイル」, 鹿屋体育大学研究紀要6, 45-56.
- 14) 川西正志, 菊地秀夫, 北村尚浩, 1992, 「成人男性の年齢とレジャーライフスタイル」, 鹿屋体育大学学術研究紀要7, 9-19.
- 15) 川西正志, 山口泰雄, 池田勝, 1987, 「社会体育指導者研究」体育の科学, 377, 545-550.
- 16) 川西正志, 山口泰雄, 河野眞, 原田宗彦, 池田勝, 酒

- 井哲雄, 1988, 「社会体育指導者の現状とマーケットに関する研究Ⅱ－資質と専門知識について－」鹿屋体育大学研究紀要, 3, 15-24.
- 17) 川西正志, 河野眞, 1989, 「商業スポーツクラブ指導者の転職志向を規定する社会学的要因」日本体育学会第40回大会号, 142.
- 18) 菊地秀夫, 原田宗彦, 1989, 「民間スポーツクラブ会員のライフスタイルに関する研究－性差と結婚の有無による差異について－」, 鹿屋体育大学紀要4, 97-107.
- 19) 北村尚浩, 川西正志, 菊地秀夫, 江橋慎四郎, 1990, 「成人男性の旅行型レジャー実施者のパケーションライフスタイル」, レクリエーション研究23号, 48-49.
- 20) 北村尚浩, 川西正志, 1991, 「スポーツ参加とレジャーライフスタイル」, 日本体育学会第42回大会号A, 143.
- 21) 北村尚浩, 川西正志, 1991, 「日常的ライフスタイル因子とパケーション・ライフスタイル」, レクリエーション研究25号, 40-41.
- 22) 河野眞, 川西正志, 山口泰雄, 原田宗彦, 池田勝, 酒井哲雄, 1988, 「社会体育指導者の現状とマーケットに関する研究Ⅰ－雇用システムについて－」鹿屋体育大学研究紀要, 3, 7-13.
- 23) Lastovicka, J. L., Murry, J. P., Jiachimsthaler, E. A., Bhalla, G., and Scheurich, J., 1987, "A Lifestyle Typology to Model Young Male Drinking and Driving", *Journal of Consumer Research*, 14, 257-263.
- 24) Martin, W. S. and Myrick, F. L., 1976, "Personality and Leisure Time Activities", *Research Quarterly (AAHPER)* 47 (2), 246-253.
- 25) Perreault, W. D., Darden, D. K. and Darden, W. R., 1977, "A Psychographic Classification of Vacation Life Styles", *Journal of Leisure Research*, 9 (3), 208-225.
- 26) Plummer, J. T., 1974, "The Concept and Application of Lifestyle Segmentation", *Journal of Marketing*, 38 (Jan, 1974), 33-37.
- 27) 社海中開発技術協会, 1991, '91 レジャー・ダイビング年報「レジャー・ダイビング産業実態基礎調査」報告書.
- 28) 岳藤史泰, 山口泰雄, 末井健作, 田路秀樹, 1992, 「地域スポーツ指導者に求められる知識・能力とは?－自己評価データによる分析－」*体育・スポーツ科学*, 1, 45-54.
- 29) 岳藤史泰, 野川春夫, 池田勝, 1991, 「職務満足と職業定着の関連に関する分析－商業スポーツクラブ指導者を対象として－」日本体育学会第42回大会号, 138.
- 30) Wells, W. D. and Tigert, D. J., 1971, "Activities, Interests, and Opinions", *Journal of Advertising Research*, 11 (4), 27-35.
- 31) 山口泰雄, 川西正志, 河野眞, 原田宗彦, 池田勝, 酒井哲雄, 1988, 「社会体育指導者の現状とマーケットに関する研究Ⅲ－社会体育指導者の養成について－」鹿屋体育大学研究紀要, 3, 121-128.
- 32) 財余暇開発センター, 1992, 「レジャー白書 '92－分散型余暇社会へ向けて－」, P. 23.